寅彦の見た風景８【水通町】

野村　学

○「*午前水通横山董氏方ニ行キ咳嗽ノ診察ヲ受ケ其レヨリ鎌木ニ至ル（略）*」
（明治 29 年 3 月 22 日の日記）

○「*(略）松嶋ニ至リシニ畑山川田（明治）等来リ居リ相伴フテ本町近辺ニ至リ漸次市況ヲ見物シテ水通田中氏ヲ訪ヒシモ不在。余ハ衆ニ分レテ帰ル。*」(明治 29 年 5 月 23 日の日記）

はじめに

尋常中学校時代の日記をみると、寅彦青年の交友関係の広さを窺い知ることができる。放課後や休日、友人と連れ立って町を出歩く姿がそこには見られる。今回はその交遊の舞台のひとつである水通町をとりあげよう。水通町は、随筆「追憶の医師達」（※1）に登場する横山董医師が医業を営み、世界的魚類分類学者・田中茂穂が高等学校へ進学するまで暮らした町でもある。田中茂穂博士は言わずと知れた寅彦先生の同級生。中学校では首席を争った仲とされる（※2)。今回はその田中博士の文章も援用しながら、未来の自然科学者ふたりの見た水通町とそこから見える風景を紹介したい。

水路のあるまち－水通町

写真１　旧水通町１丁目から西を望む

水通町は現在の高知市上町にあった。上町エリアは藩政時代に郭中に隣接して発達した地域として、北から北奉公人町、本丁筋、水通町、通町、南奉公人町、築屋敷に分けられていた（※3)。以前紹介した延命軒や今井写真店のあった旧郭中エリアとはまた違った町の雰囲気である。高等小学校時代の寅彦日記には上町地区への言及はほとんどないが、尋常中学校へ上がると、北奉公人町、水通町、通町など、この地区の町名が日記に見られるようになる。上級学校へ進む中での交友関係の拡がりによるものだろう。

『高知県の地名』（※3）によると、水通町は「慶安二年（一六四九）町並みを整備して名付けた（略)」とあるから歴史は古い。東西およそ１キロメートルの両側町。東から西に向かって１丁目～５丁目に区分される。「本丁筋の南側に並行する水通町（現・上町）は紺

屋が多く、染物をさらすために鏡川から幅八〇センチほどの水路をひき、用水にも使った。見張番をつけて監視したので、安心して飲料にも用いることができたという」とのこと（※4)。町名の由来でもあるこの水路は現在でも通りの真ん中を東西に流れている。寅彦先生も横山医師も田中博士も目にしたであろう水路である。以下寅彦先生ゆかりの二人を紹介しつつ水通町を訪ね歩いてみよう。

追憶の医師－横山董先生

水通町といえば“追憶の医師”のひとり横山董医師が思い起こされる。

「その頃、自分の家ではあまりかからなかったが、親類で始終頼んでいた横山先生という面白い医者があった。畸人（きじん）という通称があったが、しかし難儀な病気の診断が上手だと云う評判であった。」（随筆「追憶の医師達」より）

『高知県人名辞典』（※2）によると、「よこやま　ただす　横山　董（1846～1901）医師号は夢香。弘化３年の生まれ。高知城下旭村下島（高知市）の医師・横山常吉の二男で、養われて叔父・惠作の家を継ぐ」とある。また『土佐民間科學者傳』（※5）には「横山家は水通町に住し代々医家であった」ともある。董医師も叔父の家を継いで後は、ここ水通町で暮らしたのだろう。惠作の兄・蘭亭（つまり董のもうひとりの伯父）については興味深い次のような事実がある。すなわち、「長男蘭亭、亦医業を継ぎ名あり。文久元年、城外円行寺村字長芝に於て死刑囚の断罪あり、蘭亭等願ひて屍体解剖をなす。これ土佐人体解剖の始なり。」（※5)。董先生に“奇人という通称があった”のも、存外、横山家にまつわるこのような歴史（土佐初の人体解剖執刀）が影響しているのかもしれない。これは勝手な想像。

“自分の家ではあまりかからなかった”（※1）とはいうものの、明治 29 年日記を見ると、3 月から 5 月までのあいだに、自宅への往診も含めて少なくとも 6 回、寅彦先生は横山医師の診察をうけている。冒頭引用した以外にも、例えば、

○4 月 16 日 *「此日ハ学校ヲ休ミ、床ニテ読書ナドシ無聊ニ苦シム。（略）此日医師横山氏来ル」*
○4 月 26 日*「(略)水通横山ニ至リ診察ヲ受ク　心臓ハズツト快方ニ赴キ居ル由ナリ(略)」*
○5 月 2 日*「(略)正午ヨリ別役ト横山氏二至リ診察ヲ受ク　余ハ最早全快セシ由ナリ。(略)」*
等々。

随筆「追憶の医師達」では登場する四人の医師のうちで一番扱いが少ないが、日記に一番多くその名前が残されているのは横山医師である。その横山先生は水通町のどこで医業を営んだのか。残念ながらその場所は特定できなかった。今はただ、閑静な町の雰囲気の中で昔の名残をとどめる水路脇に佇み、寅彦青年が咳をしながら横山宅の門をくぐったのはこの辺りだろうかなど、想像力を逞しくして往時を偲びたい。

写真 2　水路のある町・旧水通町

写真 3　昔の面影を残す水路の石垣

交遊日記

次に、上町を中心にした交遊について日記をのぞいてみよう。

○3 月 26 日*「(略) 午方村岡書肆ニ至リ其レヨリ鎌木ヲ訪ヒシモ不在。次デ原君宅ニ至ル。恰モ在宅ニテ談数刻ノ后辞シ帰リ松嶋ニ至リシモ不在ナリシヲ以テ家ニ帰ル」*

ここに登場する村岡書肆は本丁筋、鎌木氏の家は水通町にあった。次々に友人宅を訪う寅彦青年。圧巻は 3 月 30 日だろう。

○3 月 30 日*「(略) 夕飯后別役ニ赴キ居ル中松嶋来リ共ニ東ニ向ヒ公園杉ノ段ヲ越ヘテ追手門ニ出デ山之城君ヲ訪ヒシモ不在　其レヨリ辻及ビ吉田ニ行キシモ皆不在故別役ハ江間ニ行キ余ト松嶋ハ長谷ニ行ク　主人ハ不在ナリシモ辻、尾池等来リ居リ談笑少時　余ハ江間ニ行キ君及ビ別役ヲ伴フテ長谷ニ行キ松嶋ヲ呼ビ出シテ上町ニ向フ　最初尾原教諭ヲ訪ヒシモ病気ノ由ニ付キ辞シ帰リ其レヨリ鎌木、田中、吉本（文暢)、村上等ヲ訪ヒシモ皆不在故モーヤケクソヨト一仝(いちどう)裳端折(はしょ)リテ通町ヲ過ギテ森本君ノ宅ニ向フ。(略) 既ニ就寝后ナリシモ、カマハズ内ニ上リ談笑数時。そばノ御馳走アリ。家ニ帰リシハ恰モ十一時頃ニテアリキ」*

「吾が中学時代の勉強法」(※6) では“田舎の事であるから、家に帰ると遊びの友と云

ってもわずか二、三に止まっていたくらいのもの”と当時を回想しているが、どうしてなかなかの交遊ぶりである。上記抜粋した部分だけでも、別役、松嶋、山之城君、辻、吉田、田中、･･･などなど、都合 13 名の友人が登場する。就寝中の友人宅に上がり込み、そばを食って帰るなど、まさに青春を謳歌している様子が窺える。

そしてその交遊関係のなかに、日本の魚類学界において“魚類学のレジェンド”（※7）と称される田中茂穂青年の名前も見られるのだ。もっとも日記には“田中”と記されているのみで、これが田中茂穂である確証はない。しかし田中青年が水通町で暮らしていた事実と、例えば冒頭引用した日記に“水通田中氏ヲ訪ヒシモ･･･”とあることなどから、明治 29 年日記に登場する“田中”なる人物は田中茂穂青年のことと考えてよいのではないだろうか。

これより数年の後、すなわち寅彦先生が大学院生になったばかりの明治 36 年 8 月 4 日の日記には*「田中茂穂君宅に滞留の愛知君を伴ひ帰る」*とフルネームで記されている。年譜（※8）によると、このとき寅彦先生は文部省震災予防調査会から委嘱された海水振動の調査のために高知に帰郷中。8 月 9 日からの高知県西部須崎での調査には田中茂穂青年も同行したようだ。

田中博士による追悼文「噫寺田寅彦君」（※9）には、大学卒業後に高知の寅彦宅を二度ばかり訪れたこと、その際に寅彦の質問に答える形で蝉を解剖したことなど思い出が綴られている。大学入学後は“割合に面会することもなく、文通も殆ど交換したことがなかった”ということだが、中学時代の寅彦日記には交遊の断片が残されている。

それでは田中博士の文章なども引用し水通町の風景を眺めてみよう。

<u>風景を共有する二人の科学者-寅彦と茂穂-</u>

「七歳の時に水通町へ移ったが、その時代に従兄とよく鏡川や五の瀬へヤマ（ヤンマのこと）を取りに行ったものである。五の瀬のヤマの多いのには驚いたものであるが、今でも同様であらうかといつも考へる。或秋に夜の八時過ぎ迄夢中で遊んでいて、親達を心配させ、大目玉を食ったことがある。また、水通町ではよく蜻蛉釣りをやったものであるが、これは一寸うまかった。今でもよく覚えている。」

これは田中茂穂博士が書いた随筆「昔語り」（※10）の一節である。幼少期、水通町や南の鏡川、さらに川の対岸・五の瀬で遊んだ思い出が綴られている。寅彦先生が城山や江ノ

口川、さらに北方の久万川、北山の自然のなかで遊んだことなど、高知城下の南と北で場所は違えど、ふたりの少年が同様の自然体験をしていることは興味深い。

南奉公人町で生まれた田中先生は、7歳の時に同じ上町エリアの水通町3丁目243番地に移る。以来、明治30年に第一高等学校入学のため上京するまで、ここ水通町で暮らした。（※11）『日本大百科全書』（※12）によると「田中茂穂　たなかしげほ［1878－1974］動物学者。高知県生まれ。1904年（明治37年）東京帝国大学理科大学動物学科を卒業。同学科の講師、助教授を経て、1938～1939年（昭和13～14）教授。また同期間、同大学三崎臨海実験所長を兼任。日本における魚類分類学の草分けで、約170種の新種魚類を記載、うち約90種が現在も認められている。（後略）」とある。例えば、“コンペイトウ”という名の魚がいる。まさに金米糖のようにゴツゴツした体を持つが、この魚を新種として記載分類したのが（つまり世界共通語である学名を付けたのが）田中茂穂博士である（※13）。すなわち、学名 *Cyclolumpus asperrimus* Tanaka 1912。“コンペイトウ”というセンスあふれる標準和名を付けたのも田中博士だ（※14）。（余談であるが、寅彦先生が随筆「金米糖」（※15）を書くのは1927年である。）その田中博士、故郷のことは常に心にあったようだ。随筆「土佐の風物」（※16）に次のように記している。

「今でも私の脳裏を去らないのは我が旧家（今でも現存しているが）から遠望する鷲尾山の秀麗、五台山の稜姿、西方遙に見ゆる矢筈山の雄渾などであるが、更に南方数町へ足を運べば鏡川の清流が見え、北方には近く久万山を望み、遠く樫山かと思われる付近までも仰ぐことが出来る。鏡川を越えると、すぐ石立のお八幡様があり、更に数町南方へ進むと、五ノ瀬川の幽邃を味ふことが出来たものである。」

写真4　鏡川と鷲尾山系

更に別の随筆「土佐の香ほり」（※17）では「上街で西に遠く矢筈山を望み、東に近く介良山を見る風景は世界の何所にもない美しさと私には感じられる。更に鷲尾山へ登って北に連なる高山を眺め、南遙に漂茫たる太平洋を観る時、更に「東に見ゆるが手結ヶ鼻、西

写真5　鏡川の対岸“お八幡様”の杜

に見ゆるが龍ヶ鼻」と首肯かれる時俄に童心の蘇へるのを覚へる。」と記すなど、繰り返し水通町からみた風景を語っている。寅彦先生もきっとこの風景を見たことだろう。ここに登場する鷲尾山は、寅彦先生が随筆「夕凪と夕風」（※18）に「海抜二百メートルくらいの山脈をへだてて三里もさきの浜辺を轟かす土用波の音が山を超えて響いてくるのである」と描いたその山脈のことである。寅彦少年が海鳴りを聞いた同じ時、茂穂少年の耳にもその音が届いていたのではないだろうか。

水通町訪問記

寅彦邸から旧水通町まで約 900 メートル。邸前の江ノ口川を西へ向かい、桜馬場、枡形商店街を南進。電車通りを横切り南へ入ると西向きの最初の通りが旧水通町。水路があるからすぐに分かる。ここまで歩いて 15 分ほどであろうか。ここからさらに西へ１丁目から５丁目に区分けされた約 1ｋｍの通りが続く。水路は通りをまっすぐ流れ、石垣で組まれた水路壁が昔を偲ばせる。田中博士の旧宅は３丁目にあった。横山医師宅が分からないのは残念であるが、随筆を片手に想像力を働かせるのも楽しい。通りは水路で二分され、南は車の往来も頻繁であるが、北の道は狭く通るのは歩行者のみである。したがって北を通れば想いに耽りながら散策することができる。私たちには好都合だ。時に立ち止まりながら西へ向かう。ゆっくり歩いて 30 分ほど。寅彦先生に思いを馳せる。

写真 6　青年たちの歩いた道

旧水通町を訪れて気のつくことは、路面電車の走る大通り（旧・本丁筋）から一本南へ入っただけであるのに表通りの喧噪が思いのほか気にならないことである。そして茂穂少年が蜻蛉釣りをし、寅彦青年がその横を通った水路に、今日も水が流れていることである。寅彦先生の縁（よすが）を探し求める私たちにとって、この水の流れはなによりも嬉しいことだ。今は背の高い建物に遮られ、ここから鷲尾山や久万山を見ることはできない。しかし、“更に南方数町へ足を運べば”、堤防を上がった先に鏡川の流れが、そして対岸には“お八幡様”が見える。これも昔と変わらない。昭和 27 年、田中博士は教え子の蒲原稔治（高知大学教授）の招きで高知に一時帰郷する（※19）。旧友寅彦はもういない。敗戦から立ち直ろうとする故郷の姿が、その時、田中博士の目にはどのように映ったのだろうか。いま水通町に立つ私の目には 120 年前の青年たちの残像が見える気がする。

おわりに

寅彦先生が残した郷土随筆には水通町を舞台にしたものはない。その地名は日記に残されているだけである。しかしながら、寅彦青年と茂穂青年のつながりの中で、わずかではあるが当時の様子を垣間見ることができた。水通町とそこから見える風景を共有する青年ふたりが日本を代表する自然科学者へと成長したことに、風景の力というものを考えずにはいられない。

注１）水通町という町名は現在も存在するが、本論で「水通町」又は「旧水通町」という場合は現高知市上町１丁目から５丁目のうちの旧水通町エリアを指す。
注 2）引用にあたって、旧字・旧仮名遣いで書かれているものは、適宜、新字・現代仮名遣いに改めた。

〈引用・参考文献〉

※　本文中の日記は『寺田寅彦全集　第十八巻』（寺田寅彦・岩波書店・1998 年）から引用。
※1　「追憶の医師達」（『寺田寅彦全集　第一巻』・寺田寅彦・岩波書店・1996 年）
※2　『高知県人名事典　新版』（『高知県人名事典　新版』刊行委員会・高知新聞社・1999 年）
※3　『高知県の地名』（下中邦彦編集・平凡社・1983 年）
※4　『高知県の歴史散歩』（高知県高等学校社会科教育研究会歴史部会・山川出版社・1974 年）
※5　『土佐民間科學者傳』（寺石正路・高知市民図書館・昭和 53 年）
※6　「吾が中学時代の勉強法」（『寺田寅彦全集　第十六巻』・寺田寅彦・岩波書店・1996 年）
※7　“魚類学のレジェンド”という表現については「高知市立龍馬の生まれたまち記念館」で開催された特別展「近代日本の魚類学者・田中茂穂」（期間：平成 30 年 4 月 14 日から 5 月 27 日）に寄せられた魚類学者「さかなクン」の直筆メッセージに記されていたもの。詳細は同館の学芸員・森本琢磨氏の書かれた「近代日本の魚類学者・田中茂穂【前編】」（森本琢磨・『土佐史談 269 号』所収・土佐史談会・平成 30 年）を参照されたい。なお、この論文は「近代日本の魚類学者・田中茂穂【後編】」（森本琢磨・『土佐史談 270 号』所収・土佐史談会・平成 31 年）と併せて田中茂穂博士の本格的な評伝であるのでご一読をおすすめしたい。
※8　『寺田寅彦全集　第十七巻　雑編　年譜/目録』（寺田寅彦・岩波書店・1997 年）
※9　「噫寺田寅彦君」（田中茂穂・『思想　特集　寺田寅彦追悼号』所収・岩波書店・昭和 11 年）

※10　「昔語り」（田中茂穂・『随筆　魚と暮らして』所収・思潮社・昭和 14 年）

※11　『高知追手前高校百年史』（高知追手前高校百年史編集委員会・高知県立高知追手前高校校友会・昭和 53 年）

※12　『日本大百科全書』（小学館・1993 年）

※13　『増補改訂　日本産魚類図説』（田中茂穂・風間書房・昭和 26 年）

※14　『原色日本魚類図鑑』（田中茂穂・風間書房・昭和 26 年）

※15　「金米糖」（「備忘録」所収・『寺田寅彦全集　第二巻』・寺田寅彦・岩波書店・1997 年）

※16　「土佐の風物」（田中茂穂・『随筆　魚と暮らして』所収・思潮社・昭和 14 年）

※17　「土佐の香ほり」（田中茂穂・『復刻　月刊博浪沙（第二分冊）』所収・博浪沙復刻刊行会・昭和 56 年）

※18　「夕凪と夕風」（『寺田寅彦全集　第六巻』・寺田寅彦・岩波書店・1997 年）

※19　『上町と小高坂の人物伝ガイドブック』（龍馬の生まれたまち記念館・2017 年）

〈文学散歩地図・水通町編〉